

# 社会と働く者

## つなぐ物語

### 働く現場の労苦追う



#### 名古屋の女性監督制作中

企業で働くろう・難聴者を追ったドキュメンタリー映画を、自らもろう者の映画監督今村彩子さん(28)＝名古屋市緑区＝が制作中だ。東海3県の来年2月DVD

18歳以上のろう・難聴者の数は約3万人。聴者とろう者が共に働くためには何が必要なのかについて、働く現場から一緒に考えていく作品をめざしている。(松崎祐子)

働くろう者をテーマにしたドキュメンタリー映画の撮影風景。左から2番目が今村彩子さん＝スタジオオアヤ提供

映画のタイトルは「サラリーマンライフ」。昨秋に着手し、アンケートを含めて約50人に取材した。企業で働く具体例として、ろう・難聴者約20人が働くプラザー工業と約260人が働くデッソーを紹介。初めてろう者を受け入れる側の戸惑いや社会に出るろう者の不安、それを乗り越える喜びなどが、画面の向こうの生き生きとした表情から伝わってくる。

今村さんは00年からカメラを回し始めた。これまで、全国の大学で学ぶろう・難聴学生や、ろう学校で学ぶ子どもたちの日常を描いてきた。手話が使えない人にインタビュする時は手話通訳に同行を頼む。だから撮影の日程調整にはどうしても時間がかかるという。

今回、サラリーマンを取り上げたのは、「手話などを使って情報を得ることはろう者にとって切実。この問題は生まれてから死ぬまで一生ついてくる」と考えたからだ。だが、実際に取材すると、働く現場には大学などにはない難しさがあることにも気づいた。

企業秘密の問題もその一つ。取材をした企業の担当者からは、手話通訳者が入る場合でも守秘義務が守れるのか、という不安の声を聞いた。

今村さんは「その気持ちは理解できる。でもアメリカでは、国家機密を扱う国防総省でもろう者が働き、専任の手話通訳者がいる。企業秘密の保持は不可能ではないはずですよ」と話す。

今村さんが映画と出会ったのは小学生の時。父が聞こえない娘のために借りた字幕付きのビデオで「E.T.」や「ロッキー」を見て感激した。愛知教育大在学中には、映像作りを学ぶため米国に留学した。

好きな作品は中国の女性監督張麗玲が制作したドキュメンタリー「小さな留学生」。9歳の少女が滞日期間中に、家族や周囲の愛情に支えられ成長する姿を描いた映画だ。日中の文化の違いをつなぐという点に共感した。

「私も聞こえる人と、ろうの人が持つ文化を、なぐかけはしとされるような作品が作りたい」

DVDは来年2月発売予定。2500円。問い合わせはスタジオオアヤ(電話・ファクス052・6211・9670)。